

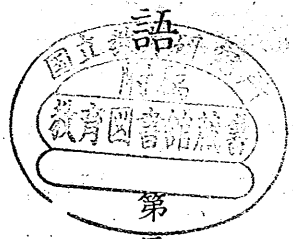


D6

324



國



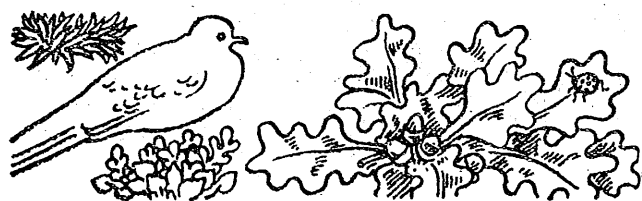
第三學年

上





十二	十一	十	九	八	七	六
ひわの子	りようかんさん	学級日記から	金のさかな	あさがおの花	星	まどをあけると
九十四	八十五	七十七	六十五	五十九	五十二	四十四



五	四	三	二	一	
心と心	石炭	ありがとう	私の旅	川のうた	もくろく
三十八	三十二	二十一	八	四	





一 川のうた

川のあかんぼ

山に雨が降る、きりがおりる、

夜は夜つゆがおりる、

水をふくんだ草のうた、こけのうた、

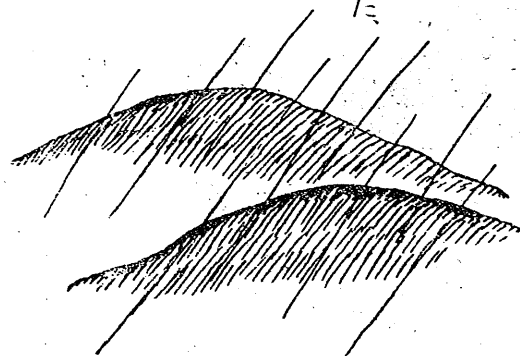
土のうた、いわのうた、

山から川のあかんぼが生まれる、

山のてっぺんのすぐちかいところ、

小さいたにまに、小さいいずみ、

小さいたにまに、小さいながれ



山から川のあかんぼが生まれる、

川のあかんぼ、チヨチ、チヨチ、アワワ、

さあ、はいはいをして、たちして、

村にでましょう、町にでましょう、

川は大きくなる

川は山からかけおりる、

小石をころころ、ころがして、

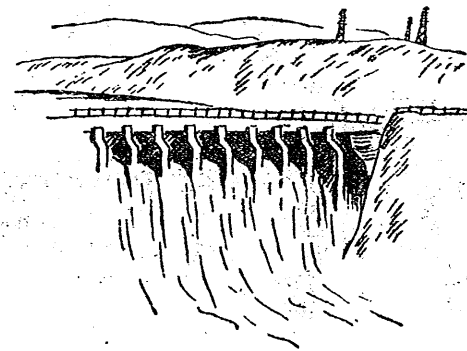
いわの上からとびおりて、

さかなとジャブジャブはしゃいで、

川は山からかけおりる、



川は友たちとあくしゅして
 川はだんだん大きくなる。
 ダムにせかれていけになり、
 水力電氣をおこし、
 水道の水にもなり、
 川はだんだん大きくなる。
 川は野原におりてくる。
 野原をゆっくりあるいていく、
 水車をくるくるまわし、
 たんぼに水をいれ、

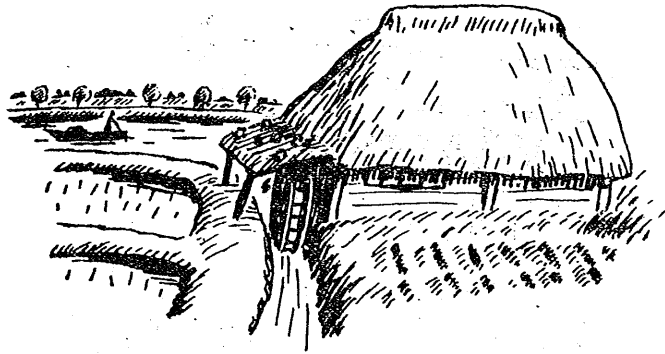


はただけにも水をまいていく。



川ははたらく

川は大きくなると、
 ゆっくりとながれていく。
 汽船や荷船がとおる。
 下水の水やうんがの水、
 きたないどぶ水をながして、
 海のおくにすてにいく。
 川はだまってはたらく。



二 私の旅

(一)

「いさん、汽車のきつぷかったの。」
「かったよ。さあ、改札口へいこう。」

パチン、パチン。

「いさん、汽車がはいってきたよ。」

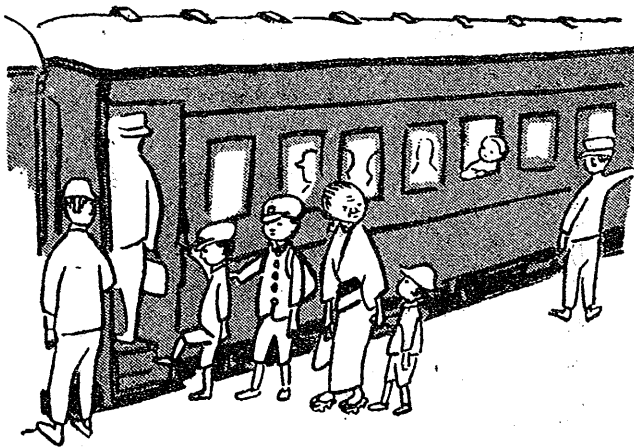
「シユ、シユ、シユ。」

「おりるかたがすんでから、ごじゅんにお乗りください。」
「さあ、じろう、お乗り。」

「ポ、ポ、シユ、シユ、シユ。」

「シユ、シユ。」

「どこかのおばあさんとぼっ
ちゃん、乗ってきたよ。
じろう、せきをあけて、あ
のぼっちゃんをかけさせて
おあげ。」
「どうも、ありがとうございます。
ます。」
「おばあちゃん、海がみえる
よ。」



「きれいな海なこと、お船もみえますね。」

「おばあちゃん、まっくらになった。」

「トンネルですよ。ここは、みなさんで、苦勞をしてほつてくださったトンネルですよ。」

「もう明かるくなった。あ、あそこにきれいなさくら。」

「ずいぶん早いね、にいさん。」

「きかんしの人が、いっしょうけんめいに走らせているからさ。」

「どこで走らせているの。」

「いちばんさきのきかん車の中でさ。」

ビューッ、ビューー。

「あつ、びっくりした。」

「おこうからきた汽車とすれちがったのさ。」

「しょうとつしたかと思った。」

「そんな心配はいらない。駅

の人たちは、いつも氣をつ

けているよ。ほら、あそこ

をごらん。」

「あれ、なにかしら。赤と青

のしるしのついたもの。」



「シグナルだよ。あれをみて、汽車がどまったりとおつたりするのだ。」

「ぼうや、ここですよ。おりましょう。どうもありがとうございます。」

「おにいちゃん、ありがとうございます。」

「ぼっちゃん、さようなら。」

「さようなら。」

「きつぷをはいけんさせてもらいます。」
「にいさん、あの入だあれ。」

「車しゅうさんさ。」

「どうして きつぷをみるの。」

「まちがって乗っている人がいないか しらべるのさ。」

「ぼくたち、まちがっていないの。」

「だいじょうぶだよ。」

「はい。」

「どうもありがとうございます。このつぎの駅ですね。」
「そうです。」

「やっどついた。わすれものはないか じろう。」
「ありません。」

どまってから、おりるんだよ。

シユ、シユー、シユー

にいさん、もうおりていいの。

「いいよ。」

「おもしろかった。」

「きっぷを改札口でおだし。」

「じろうちやん、いらっしやい。」

「おばさん、こんにちば。」

「おばさん、わざわざきてくださって、すみません。」

(二)

私は、としおさんが、みつおさんにあてて書いた手紙です。私も、いまから旅にでかけます。

ゆくさきはむねのところに書いてありますから、まちがいはありません。けれども、このままでは旅はできません。切手をはってもらうのです。これは、汽車の旅にきっぷがいるのと、おなじことです。汽車のきっぷは、遠い、近いによって、ねだんがちがいますが、私は、三十銭でどこへでも旅をすることができます。

では、としおさん さようなら。

ポストにいれられると、友だちといっしょになりました。

そこへ、配たつをする人がきて

「さあ、このかばんにはいるんだよ。」

といって、私たちをみんなかばんにいれました。

「きみは、どこへいくの。」

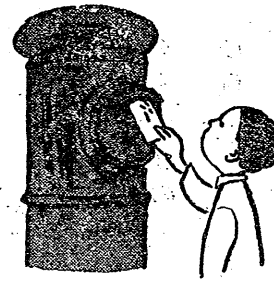
「ぼくは、さっぽろまで。」

「あなたは、どこまでいくの。」

「わたしは、かごしままで。」

こんな話で、かばんの中はにぎやかで

す。まもなく、私たちは、ゆうびんきょくの大きなはこの



中にはいりました。そこは私たちの山です。

「ねえ、きみ、ぼくは遠いところ

へいくんだけど、あて名の字が

そまつなので、わかりにくくて

心配さ。」

「わたしのはこんな小さな字だか

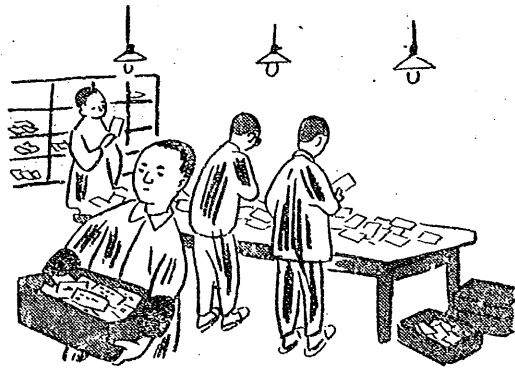
ら、なお心配ですよ。」

「あなたたちはまだいい。このわ

たしのをごらん、うそ字さ。わ

たしは、ちゃんとゆくさきは知

っているが、うそ字だから、とんでもないところにやら



れるかと思つて、びくびくしているところだよ。

そのうちに、きよくの人が、私たちをかたはしからしらべていって、北の方へいく友だちと、南の方へいく友だちと、西の方へいく友だちと、東の方へいく友だちを、それぞれひとかたまりにわけてくれました。

「さようなら。」

「さようなら。」

「さようなら。」

おたがいに、であつたと思つたら、すぐおわかれてした。そこで、私たちは、じょうぶなふくろにいれられて、かぎをかけられました。こんなにだいにしてくれそうですから、

おちる心配はありません。

私たちは、汽車につまれて、

どんどん、南へはこばれました。二日めのあさ、やっと汽車からおろされ、自動車につみこまれて、ある町のゆうびんきょくにつきました。

ふくろの中からだされて、

ほっとしていると、こんどは、

また、かばんの中にいれられました。

配たつをする人は、自てん草に乗って走りました。私の



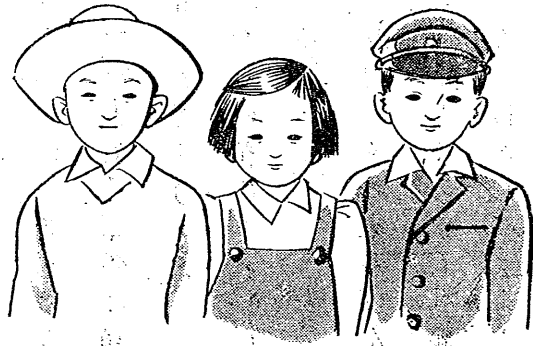
なかまは、一けん一けんにくばられはじめました。私もその人の手ににぎられながら、あちらこちらへまわりました。しげた竹やぶの小道をとおりたり、すずしい川のきしを走ったりしました。

なしの花のきれいにさいている家に、はいりました。
「ゆうびん。」

私は、その家のげんかんにおかれました。

としおくんから手紙がきたよ。

みつおさんがよろこんで、私を手にとりあげました。私は、ぶじに、としおさんの心を、そのままみつおさんにおつたえすることができました。



三 ありがとう

ある日のゆうがたでした。一だいの長い電車が、おきやくをいっぱい乗せて、終点につきました。あまりこんでいましたので、みんな、ぶつぶつとごごをいいながら、出口の方へでていきました。しかし、その中に三人だけ、たいへんよろこんで帰っていった子どもがありました。

いちろうさん

いちろうさんは、おかあさんのさとの、いなかにいきました。ひさしぶりにおじいさんにおあいして、おもちゃ、まっ白にこなのふいたほしがきなどをいただいて、たいへんかわいがられました。しかし、きょうのうれしさは、それだけではありません。

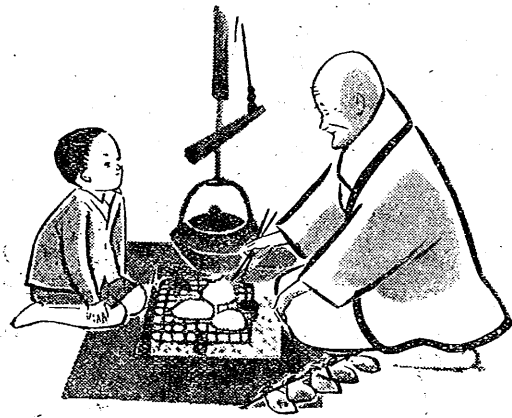
いちろうさんが家に帰ると、おかあさんが、げんかんにむかえにでました。

「きょう、ぼく、とてもうれしかった。」

「おじいさんが、かわいがってくださったのでしょう。」

「それもあるけど。」

「まだほかにあるの。どんなこと。」



「あのね、帰りの電車はとてもこんでいたんです。それで、どこかのおばあさんのよこのところに、もたれかかっていると、こしをかけていた知らないおじさんが、おりるとき、ぼっちゃん、おかけなさい。」
「といって、かけさせてくれたんです。」

ところが、ぼくのまえに、まつばづえをついた。わかい
人がいるんです。ぼくは、はっと思つて、すぐ立つて、
その人をすわらせてあげました。」

「そう、それはよかったね。それでうれしかったの。」

「それもあるけど、そうしたら、ひとりの人が立ちあがって、
男の人は立つてください。」といつて、みんなを立たせ、
不自由な人や、女や、子どもたちをすわらせました。

そのとき、どこかの女の人が、ぼくに氣がついて、

「ぼっちゃん、あなたもおかけなさいな。」

といつて、せきをすこしあけてくれました。

けれども、

「ぼくは、もう大きいんですから。」

といつて、どうとうかけなかったの。

「それでうれしかったのね。」

「ええ、はじめは、電車の中は、まるでにらめっこをして
いるようだったのに、それから、みんなにこにこして
友だちのようになかよくなってきました。ほんとうは、
それでうれしかったんです。」

はるこさん

はるこさんも、こにこして帰ってきました。駅の出口ま
でくると、でむかえにきていたおねえさんをみつめました。

「ただいま。」

「しんきちが、早かったね。」

しんきちくんのおとうさんは、店で

そろばんをはじいていました。

「ぼく、きょう、とてもうれしんです。」

「どうしたのだね。」

「ぼく、こんな本をもらいました。」

「先生からかい。」

「いいえ、むこうの店に品物をとどけ

て、受けとりをもらって帰ってくる

とちゅう、よその人からもらったんです。」

「まあ、受けとりをおみせ。——よしよし。それから、う

れしかったというのはどんなことかね。」

「それはこうなんです。店をでてすこしくると、どこかの

おじさんが、荷物を二つ持って、あせをふきふきあるい

ていました。一つは大きくて、ぼくなんか、とても持

てそうもない物、一つは小さくてかるそうな物です。

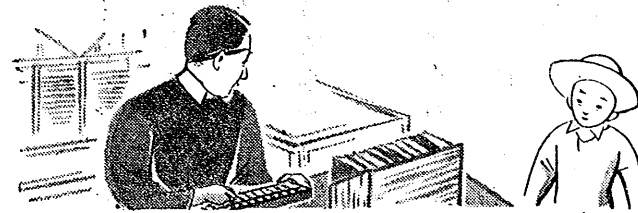
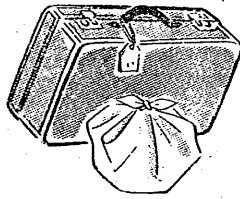
そこで、ぼくは、

「おじさん、駅へおいでになるのですし、

う。ついでですから、一つ持っていっ

てあげましょう。」

と、いいました。



「ありがとう。しかし、きみは小さいから、まあいいよ。だいじょうぶです。ぼくにも持てそうですから。」
「だって、小さいほうの荷物を、わたしてもらいました。その荷物は小さいわりに、なかなかおもかったのですが、ぼくは、かたへのせて持っていきました。駅につくと、その人は、」

「ありがとう、ありがとう。ほんとうにすまなかったね。きみは、ときどき、こういうことをやるのかね。」

「ときいたので、ぼくは、いいえ、はじめてです。まえからも、やりたいと思っ
ていましたが、なかなかできなかったのです。ぼくに
はすこしおもかったんですが、とてもうれしんです。」

「これから、いつもやりたいと思います。」

「いいました。すると、その人は、トランクからこの本をだして、」

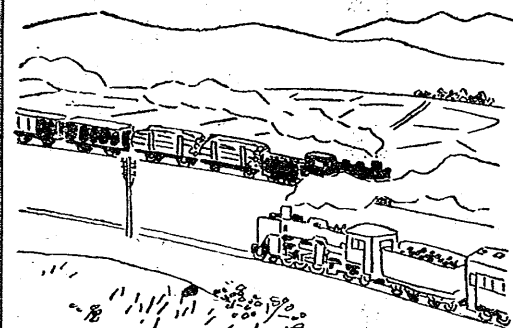
「これには、きみのようないい子どものことが書いてありますよ。」

「だって、ぼくにくれました。それで、ほんとうにうれしいんです。」



四 石 炭

「シュッシュッ、ポッポ、シュッシュッ、ポッポ」



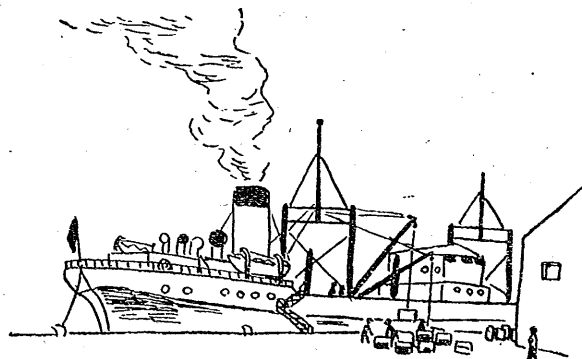
汽車が走っています。まっ黒なけ
わりをもうもうとほいて、どんどん
走っています。おや、むこうからも
長い、長い貨物列車がやってきます。
材木や、石炭や、お米を、たくさん
つんでいます。
この汽車は、なにをたいて走って
いるのでしょうか。

これは貨物船です。かんぱんのク
レーンが、あがったりさがったりし
て、荷物をつみこんでいます。この
荷物の中に、おり物や、お茶や、しん
じゅなどがはいっています。

船は、なんの力で走るのでしょうか。

○

えんとつがたくさん立っています。
どのえんとつからも、けむりが、む
くむくとたちのぼっています。



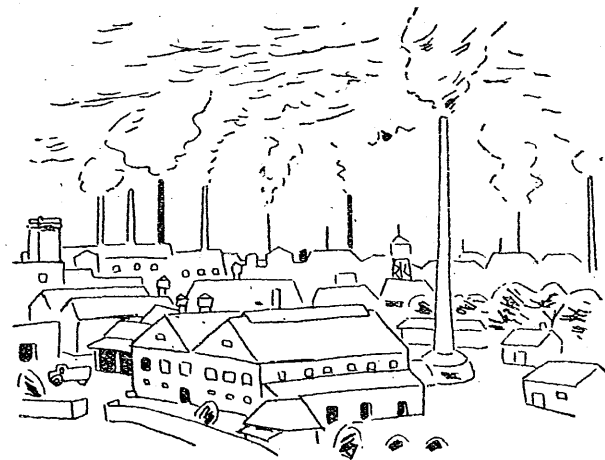
ここは工場町です。ここで
きかいや、ひりょうなど、た
いせつな品物を作っています。
この工場のきかいを動かして
いる力は、なんでしよう。

○
おかあさんが、だいどころ
で、ごはんのしたくをしてい
らっしゃいます。

ガスこんろにかけたかまや
なべから、ゆげがふきでてい

ます。ガスこんろの青い火は、ガスがもえているのです。

あのがスは、なにかから作るのです。



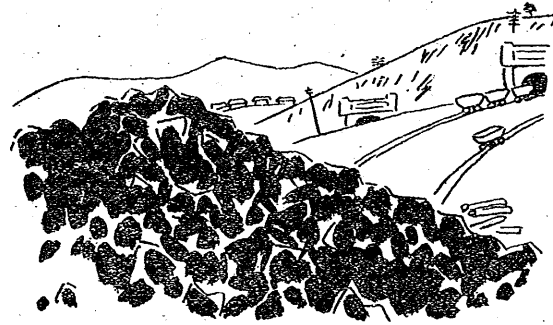
○
なにをしているところでしょう。
これは、石炭をほっているところ
です。まわりのかべに、石炭がで
ています。さかんに、きかいで石
炭をくずしてとっています。

とれた石炭は、トロッコにつん
で、そとへはこびだします。

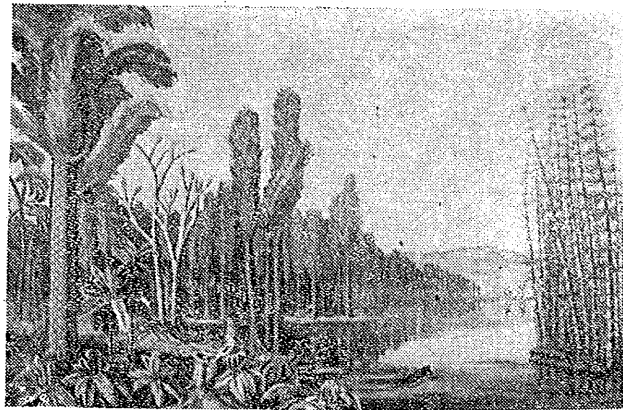
ほりだされた石炭が、山のようにつまれています。この石炭が、汽車や汽船を走らせ、工場のきかいを動かすのです。

ガスも石炭からとれるし、そのほか、いろいろのくすりも石炭からとれます。私たちは、石炭なしには、くらすことができません。では、石炭は、どうしてできたのでしょうか。

みなれない木や、草や、動物がみえますね。



これは大むかしのけしきです。このような木が、たおれて土にうずまり、長いあいだかかって石炭になったのです。大むかしのたいようのねつが、かたちをかえ、石炭の中にたくわえられていて、いまそれが、私たちのために、生き返ってはたらいっているのです。



五 心と心

(一)

けさ、先生に、先生のお友だちから手紙がきました。そのかたは、ほっかいどうで、やはり先生をしていらっしやるのです。手紙の中に、こんなことが書いてありました。「ぼくも、三年生を受け持っている。こんど、ぼくの受持の子どもたちに、手紙を書いてもらって、きみの受持の子どもたちに、それを送ってあげよう。そうすれば、こちらのようすが、いろいろとわかるだろう。」

(二)

「ほっかいどうは、いまがいちばんのいいときです。冬がすぎて、春がきたからです。山のてっぺんには、まだ雪がのこっています。けれども、中ほどから下は、雪がありません。山の木がはじめました。ふもとになるにしたがって、木のみどりがこくなってみえます。茶色の木のめもみえます。このきれいなけしきを、みなさんにおみせしたいと思います。」

○

「こちらでは、さくらの花も、なしの花も、すももの花も、うめの花も、りん



この花も、いっぺんにさきだします。

きゅうにあたりが美しくなると、私は、なんだか、ぼんやりするほどたのしい氣がします。

私のすきな花は、こぶしの花です。白くてゆったりとさく、ひんのいい花です。この花がよくさく年は、ほう年だといえます。いま、たくさんさいています。

○

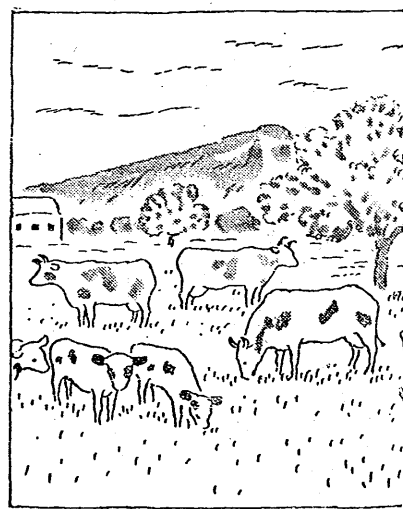
ぼくのうちには、うしが十三とういます。白黒ぶちのちちうしです。なかに、子うしが三とういま



すけさも、まきばにだしてやりました。のびはじめた草の上を、うれしそうにあるいていました。子うしは、小川の岸をどこどこ走りました。まいにち、たくさんちちをしぼります。

(三)

「ほっかいどうのみなさん。このあいだは、お手紙ありがとうございました。みんなだいじにして、こくばんのと



ころにならべてあります。私は、まだ、ほっかいどうへ
いったことはありません。けれども、お手紙でよくわか
ります。ひろびろとした



きれいなところだと思います。
ほんとうに、一どいてみた
いと思います。

○
「こちらでは、田うえがはじま
りました。私は、なえはこび
をしています。つばめが、私
のすぐ目のまえを、いたり
きたりします。一日じゅうて

つたいをして、うちに帰るころは、もう、あたりはくらく
なっています。きのう、はじめてほたるをみかけました
そちらでも、ほたるはとびますか。」

○

「ぼくのねえさんは、あさひがわへおよめにいっています。
ぼくはねえさんから、よくうたをおしえてもらいました。
ねえさんはいい声でした。ぼくのうちは花屋です。です



から、花ばたけで、よくいっしょにうたい
ました。ぼくのすきな花は、あさがおです。
空色のあさがおです。それから、まっかな
カーネーションです。そのたねをこんどお送りします。」

六 まどをあけると

日本の子ども

ぼくら、日本の子どもらは
はとだ。平和のはとだ。

世界の友よ、手をつなぎ、
なかよくとんであそぼうよ。
明かるい世界の空とんで、
平和のうたをうたおうよ。



ぼくら 日本の子どもらは
つぼみだ。きれいな花だ。

世界のそのにさきにおう、
きれいな花のその一つ。
みんななかよくさきそろう
世界の花ぞのかざろうよ。

ぼくら、日本の子どもらは
星だ。光った星だ。
世界の空のかず多い、
かがやく星のその一つ。



みんななかよくきらきらと、
しずかな空で光ろうよ。



やぶうぐいす

おつかいにいくとき、うらの竹やぶのそば
を通ったら、おくの方でうぐいすの聲がした。

「ホーケ、ホーケ。」というようにきこえた。

たちどまると、鳴き声がやんだ。

しばらくすると、また「ホーケ。」と鳴いた。

春になったばかりだから、うまく鳴けないのだらう。

歸りに、また通ったら、もう鳴いてはいなかった。

たのしい小道

いつも通るこの小道

たのしい小道だ。

ひとりで通るときも

みんなで通るときも

たんぽぽがさいていたり、

すみれがさいていたり、

名まえは知らないが、

きれいな花がさいていたり。



おや、こんな花が――

またみつけた、きれいな花を、
いつ通っても、いつもたのしい、
この小道。



まどをあけると

まどをあけると、

いまのぼったばかりの日の光が、
さつといっぱいながれこんできた。

いい氣持がして、たのしくなった。

あさの光に、身をきよめるのはうれしい。



わたし船

のたりのたりとわたし船、
なの花ざかりの岸をでる。
子うしが水のむ岸をでる。

のたりのたりとわたし船、
かふんやそよ風のせてでる。

子どもや荷物のせてる。

のたりのたりとわたし船

おもさにゆれゆれ岸をでる。

かげをちらして岸をでる。

海へ

がけの下には

白いはま

白いはま。

あみひく人の

黒いかげ

黒いかげ。

島をとりまく

青い海

青い海。

きてきも鳴らさず

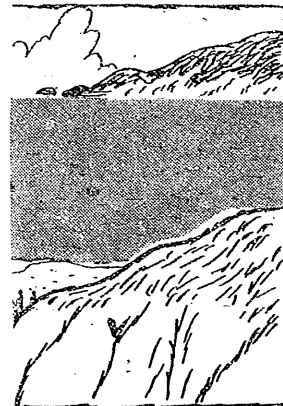
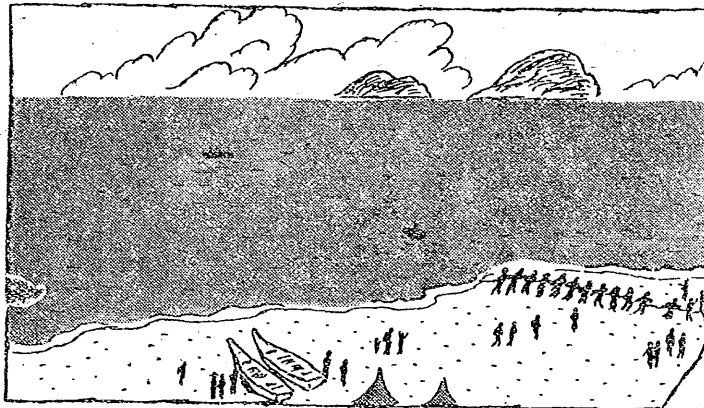
船がいく

船がいく。

海のはてから

白い雲

白い雲。



ひつじになって

わいてくる

わいてくる。

七 星



ゆうごはんをまつあいだ 私は まさこ
をうば車に乗せて、はるおと大通りにで
ました。いそがしそうに人々が通ります。

「こんばんは。」

ど、あいさつをしていく人もあります。まさこが、

「あれあれ。」

というので、西の方をみると、日がしずんでまもない空に
大きな星が光っていました。

「まさこちゃん、一ばん星みつけたのね。えらいわね。」

といって、手をたたいてやりますと、まさこも、まるくふ
とった手をたたきました。

「二ばん星みつけた。」

大きな声で、はるおが、東の空をみながらいいました。

「ああ、あれね。だいたい色の大きな星なこと。」

それは、南東の空で光っていました。

「三ばん星は、ねえさんがみつけたいわ。」

そう、いいながら西の方をみると、小さな星がちらちら光っ

ていました。

「あれ、三ばん星。」

「なんだ。あんな小さいの。それより、ほら、もっともっ

と高いところに、四ばん星——赤い星。」

「ほんとに、はるおさんは目が早いのね。」

そこへ、となりのごろうさんが、かけよってきて、

「五ばん星、あんなところ。」

空のまん中に、大きな星が光っていました。

それから、あたりをみまわしましたが、空は、まだ、ほんのりと明かるくて、つぎの星をみつけることは、できませんでした。まさこをおかあさんにわたして、食事をすま

せてから、またちょっと、家のまえにでてみました。三十分ぐらいしかたっていなかったのに、もうすっかりくらくらになっていて、空いちめんに、星がでていました。

「さっきみつけた星は、どれだったかしら。」と思って、西の空をみましたが、わかりませんでした。

そこへ、受持のやまもと先生がおいでになって、

「今夜、学校のにわで、ぼうえんきょうで星をみせますよ。いってみませんか。」

と、さそってくださいました。

私は、おかあさんにこのことをいって、ごろうさんをさそって、はるおといっしょに、学校へいきました。もう

たくさん、子どもや町の人々が、あつまっていました。

「今夜みるのは土星です。あそこに大きく光っている星ですよ。」

私は

「はるおさん、ほら、あなたのみつけた二ばん星よ。あれ土星というのよ。」

じゅんばんがきたので、みせていただきました。

「みえる、みえる。まん中にまるいきれいなたまがみえる。そのまわりに、うすい、大きな、麦わらぼうしのつばみ。たいなものもみえる。きれいだこと。」

「ねえさん、早くみせて。」

はるおにさいそくされて、ばんをゆずりました。はるお

は、のぞいていましたが、かげんがわからないようです。

「あわてないで、しずかにごらん。」

私は、こういって、はるおのかたをそっとおさえました。

「あつ、でた、でた。」

あんまり大きな声をだしたので、あたりの人がわらいました。

「ねえさん、あれが星なの。」

「星ですよ。」

「へんなもんだな。おもちゃみたいだ。」

また、みんながわらいました。

「あんまり長くみていないで、さあ、おかわり。ごろうさんにおみせなさい」
はるおは、まだみていたいようでしたが、やっと目をはなして、ばんをごろうさんにゆずりました。

「ほんとうにきれいだな。なんだか、青い、青い水の中に入っているようだ」

「ほんとうに、夜の星ってきれいなものね」

「あれが、ぼくのみつけた二ばん星かなあ」

私たちは、まもなく帰ってきました。ごろうさんは

「ぼく、大きくなるまでに、どの星もみんなみてしまいたいな」

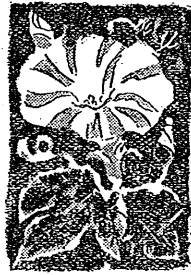
「いいました。するとほるおも」

「ぼくも」

「いいました」

私は、いまみてきた土星を、紙に、いいねにかいておこうと思いました。

八 あさがおの花



かきねにあさがおの花が、三つはじめてさきました。どれも空色です。あやこは、それを見つけて、

「おかあさん、あさがおがさきましたよ」

といました。

「ほんとうに、きれいにさきましたね。いい色ですこと。」

「あの三つの花が、そろってしんこきゅうしているようにみえますね。」

「あとで写生してごらん。おまえが、たねをまいたのでしたね。」

「そうです。この春まいたのです。たねをまいたから、こんなにさいたのですね。」

「でも。」

「でも——って、なにか、おか

あさん。」

「でもね、そのたねからめがでなかったら——」

「めがでないことはありません。わたしが水をやったんですもの。」

「それでも、まいにちあのつるをのばしたのは、だれかしら。あやこさんがひっぱったの。」
「いいえ。」

「あのつぼみをこしらえたのは、だあれ。」



「げさ、こんなに大きな花を、三つもさかせたのは、だあれ。」

花の色を空色にそめてくれたのは、だれでしょう。」

あやこは、なんとこたえていいのか、わからなくなってしまいました。

あさごはんのとき、はたけではじめてとれたきゅうりをたべました。

「きれいなきゅうりね。おかあさん。」

「このきゅうりだって、あさがおとおなじですよ。たねはおかあさんがまいたのだけれど、こんなによくできたのは、おかあさんの力ではありませんよ。」

「だって、おかあさん。こやしをやったり、手をやったりしたじゃありませんか。」

「せわはしてやりました。けれども、花がついたり、みになったりしたのは、おかあさんのせいではありませんよ。おとうさんは、この話をそばでおききになって。」

「あやこも、このきゅうりも、あさがおの花もおなじだよ。」
「だって、おわらいになりました。」

「生まれたときは、ねてばかりいたのが、はうようになり、立つようになり、あるくようになって、いまは、もうこんなに大きくなった。」

「あさがおやきゅうりは、自分ひとりで、大きくなったの。」

でしようが、わたしは、おとうさんやおかあさんの力で、

大きくなったと思います。」



「生まれたときからせわはしてきたが、日に日に大きくなったのは、おまえひとりの力でもなければ、おとうさんやおかあさんの力でもない。」

「おとうさんも、おかあさんも、こうして、まいにち、たっしやで生きていけるのは、だれのおかげだろう。さあ、考えてごらん。」

九 金のさかな

海べに、おじいさんとおばあさんが、住んでいました。ふたりは、ふるい小さな家に住んでいました。

おじいさんは、あみでさかなをとり、おばあさんは、糸をつむいでくろしていました。

ある日、おじいさんは、海にでてあみをなげました。すると、



金のさかながかかってきました。

金のさかなは

「おじいさん、わたしを海へはなしてください。お礼はたくさんさしあげます。」

といました。

おじいさんは

「金のさかなさん、早くお帰り。」

とやさしくいって、はなしてやりました。おじいさんはうちへ帰って、おばあさんに、このふじぎな話をしました。

「わしは、きょう、金のさかなをとったよ。それが、海へ帰してくれ。お礼はいくらでもあげるといったが、わし

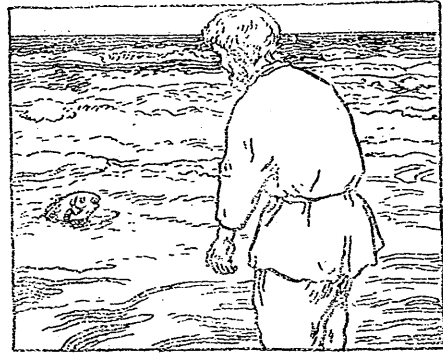
はお礼などもらわなかった。そうして、青い海へはなしてやったよ。」

おばあさんは

「どうしてお礼をもらわなかったの。せめて、おけの一つも、もらってくればよかったのに。うちのおけは、もうすっかりこわれてしまっているんだもの。」
といました。

あくる日、おじいさんは海へやってきました。海はすこしあれていました。おじいさんが金のさかなをよびますと、すぐでてきて

「なんの用ですが、おじいさん。」



とききました。

「金のさかなさん、おばあさんが新しいおけがほしいといっています。」

「おじいさん、心配しないでお帰りなさい。帰るまでには、新しいおけができていますよ。」

おじいさんが帰ってみると、おばあさんは新しいおけを持っていました。ところが、おばあさんは

「こんなおけなんて、とくにもならない。もう一ど金のさかなのところへ行って、家をもらっておいで。」

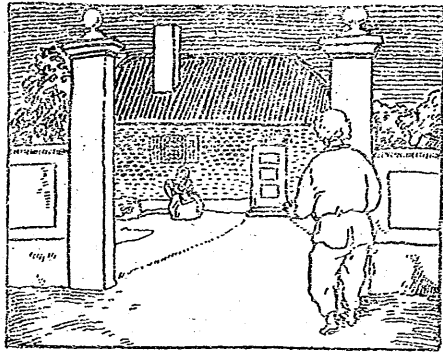
おじいさんは海へやってきました。海はにぎわっていました。おじいさんが金のさかなをよびますと、およいできてきました。

「なんの用ですか、おじいさん。」

「うちのおばあさんは、家がほしいというのです。」

「おじいさん、心配しないでお帰りなさい。家はちゃんとできていますから。」

おじいさんが帰ると、りっぱな家がたっていました。



おばあさんは

「金のさかなのところへ行って、たのんでおくれ。わたしは、ひゃくしょうなんか、もういやになったから、お金持のおくさんになりたいって。」

といました。

おじいさんは、また海へやってきました。海はあれていました。

おじいさんが金のさかなをよびますと、金のさかながおいできました。

「おばあさんは、もうひゃくしょうはいやになったから、お金持のおくさんになりたいというのです。」

「おじいさん、心配しないでお帰りなさい。」

おじいさんがおばあさんのところへ帰りますと、おばあさんは、けがわのふくをきて、ぴかぴか光るずきんをかぶり、金のうでわをはめ、赤いくつをはいていました。めしつかいたちもいました。

おじいさんが、

「お金持のおくさん、これであな

たもまんぞくでしょう。」

といますと、おばあさんは、おじいさんをうま小屋のし



ごとにおいやりました。

それから三日ほどたって、おばあさんはおじいさんにいきました。

「金のさかなに、わたしは金持のおくさん、もいやになった、女王になりたいってたのんでおくれ。」

おじいさんはびっくりして、

「おばあさん、氣でもちがったかね。女王さまのようなあ
るきかたも、口のききかたも知らないで——國じゅうの
ものわらいになるよ。」

「おまえさん、ぐずぐずいわずに海へいっておいで。」

おじいさんは、とぼとぼと海へやってきました。海はま

っ黒になってあれていました。おじいさんが金のさかなを
よびますと、金のさかなは

「なんの用ですか、おじいさん。」
とたずねました。

「金のさかなさん、おばあさんは、もう金持のおくさんは
いやだ、女王になりたいといっています。」

「おじいさん、心配しないでお帰りなさい。おばあさんは
女王になりますよ。」

といました。

おじいさんが帰ってみると、どうでしょう、ちゃんどご
てんができていて、おばあさんは女王になっているではあ

りませんか。そばには、りっぱなけらいもついています。

おじいさんは

「女王さま、これで、あなたもごまんぞくでございましょう。」
といました。

おばあさんは、おじいさんには目もくれないで、けらいに

「あちらへつれていけ。」
といつけました。

それから一週間もたったころ、おばあさんは、おじいさ

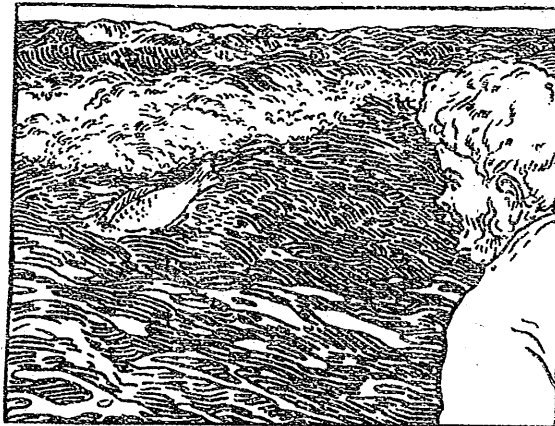


んをよんでいました。

「金のさかなにたのんでおいで。
った。こんどは、海のぬしにな
りたい。あのひろい海で、
金のさかなをけらいにしてや
りたい。」

おじいさんは、口ごたえもて
きず、力のない足どりで、海へ
やってきました。

海はまっ黒になって、波が高
く、ゴーゴーどうなっています。



わたしは女王もいやにな

おじいさんは金のさかなをよびました。
金のさかなは、でてきていいました。

「なんの用ですか、おじいさん。」

「うちのおばあさんは、もう女王
はいやだといっています。海の
ぬしになりたい。ひろい海で
あなたをけらいにしたいといっ
ています。」

金のさかなは、なにもいわない
で、しっぽでビシヤリと音をさせ
て、海の中へおよいでいってしま



いました。

おじいさんは、すごすごと、おばあさんのところへ帰
りました。みると、まえに住んでいた、ふるい小さな家がた
っていました。入口におばあさんがすわっていました。こ
われたおけが一つ、ころがっていました。

十 学級日記から

七月十一日 月

先生のつくえのかびんに、大きなひまわりの花が、三本
かざってありました。かおよりも大きな花です。先生が、



「やあ、きれいですね。だれが
てくれたのですか。ごこのずが工
作の時間に、写生しましょう。」
とおっしゃいました。
ひまわりの花は、いけさんが自
分のうちのにわから、持ってきてく
れたのでした。これで教室が明る
くなりました。

七月十二日 火

きょう、先生といっしょに、学校のはたけのむこうを流

れている小川のところにいきました。そうして、川をみて
氣のついたことを書きました。

つぎのような文が、はりだされました。

「チヨロチヨロ、ひくく鳴ったり高く鳴ったりしています。」

「おなじところで、いつまでも高く鳴っています。」

「ピシャピシャと、あがったりさがったりして、流れてい
きます。」

「川の中の石が、のびたりちぢんだりしています。」

「葉のかげぼうしが、魚のようにおよいでいます。」

「川から水がわきあがってくるようです。」

「波が、すべりたいをすべるように、らくらくと流れてい

きます。

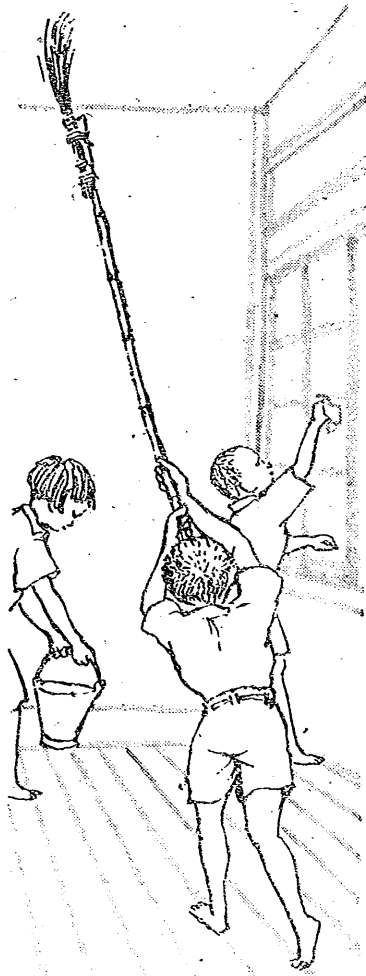
「川の中の石と石とが、おどっています。」

「水が光って、どんではねています。」

「水の音をきいていたら、せなかがあつくなってきました。」

七月十三日 水

きょうは大そうじをしました。ゆかをきれいにふきました。かべいたもふきました。竹のさきにほうきをむすびつけて、てんじょうのくものすをはらいました。むすびめがとけて、ほうきがおちました。それが、にしみさんのせなかにあたりました。にしみさんはびっくりして、「ギャ



ア』どいってどびあがったので、みんなわらいました。ガラスもきれいになって、そとのけしきがよくみえました。

七月十四日 木

きょうは五人も休みました。

「どうして、きょうはこんなに休んだのでしょう。みんなからだに氣をつけてください。じゅくさないものをたべないようにすること、夜は、はらまきをきちんとして、ねびえをふせぐこと、それから――」

と、先生がおっしゃいました。みんなは、なま水をのまないことや、ねるまえにたべないことや、日のかんかんてるところで長くあそばないことなどを、話しあいました。

七月十五日 金

先生のお友だちが、学校をみにいらっしやいました。そうして、私たちの教室にもおいでになりました。そのお友

だちが、記念に写真を写したいとおっしゃいました。そこで、おひる休みのとき、私たちは、運動場にあつまって、先生をまん中にしてならびました。

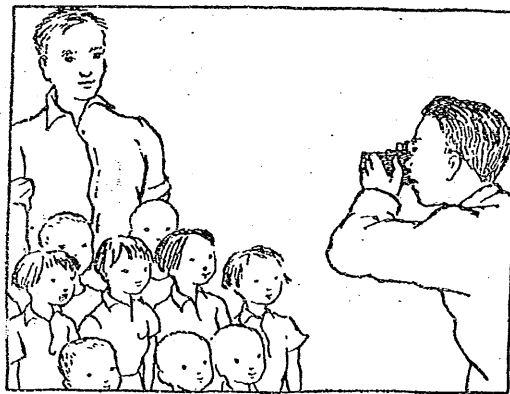
先生のお友だちが、

「いいですが、写しますよ。」

とおっしゃったとき、だれかが、

「うふふ。」

とわらいだしたので、みんな、いっぺんにわらってしまいました。そこをパチリと写されました。



七月十六日 土

夏休みになにをするか、みんなて話しあいました。

たかぎくんは、え日記を書くといいました。

たなかさんは、おしぼをたくさん作るといいました。

ささきくんは、星をしらべるといいました。

いとうくんは、海岸のおじさんの家で、海の作文を書くんたといっ、て、よろこんでいました。

いのうえさんは、國語の本にでていることばを、五十音にわけてみるといいました。

「それはおもしろい。いのうえさんの字びきができますね。」と、先生がおっしゃいました。

十一 りょうかんさん

「子どもたちがくるまでに、そこらをきれいにそうじしておこう。」

りょうかんさんはこういいながら、ほうきを持って、木の葉をはきよせました。そこへ、村の子どもたちが、

「りょうかんさん。りょうかんさん。」

とよびながら、走ってきました。

「おお、みんなそろってきたな。おやおまつさんがいない。どうしたのかい。」

「おまつさんはあとからきますよ。」

「ああ、そうか。」

そのとき、下の方から、

「りょうかんさん、りょうかんさん、おしょうさんのりょうかんさん。」

ど、うたのようにふしをつけてよびながら、ひとりの子どもがきます。

りょうかんさんは、ほうきの手をとめて、

「おまつさんが、あなたがみえなかったから、かぜでもひいたかと思って。」

「りょうかんさん、このおにんぎょう、かわいいでしよう。」

「これはかわいいにんぎょうだ。黒いかみのけがふさふさ

して、まるい目が二つあって。」

「どのおにんぎょうでも、目は二つですよ。」

「わしは、三つも四つもあ
るかと思っていたよ。あ

はははは。」

「おかしいわ。目が四つも
あっちゃ。」

「このおにんぎょうは、き
れいな赤いおびをしめて
いる。いいおびだ。わし
もほしいな。ちよつとか



しておくれ。

でも おぼうさんが赤いおびをおしめになると、へんでしょう。

なに、へんじゃない。黒いころもに赤いおび——かわいいよ。

あら、おかしいわよ。

「きょうは、おにんぎょうのおもりのしかたをしてみせてあげよう。さあ、ここへおいで。」

子どもたちが、みんな、りょうかんさんのまわりにあつまりました。

「こうして右の手でだいてな、左の手でかかえてさ、それ

から、うたをうたうのだよ、

高い山からたにそこみれば、

うりやなすびの花ざかり、

あれは、よいよいよい、

これは、よいよいよい、

うらの山から海べをみれば、

波にうかんださどが島、

あれは、よいよいよい、

これは、よいよいよい、

ひとりの子どもが、

「りょうかんさん、いま、さどが島とおうたいになったとき、おじぎをなさいましたね。あれはどうしてですか。」とたずねました。

「わしのおかあさんはな、ずっとまえに、さどが島においてなされたことがあった。それでな、さどが島をうたうときには、いつでもおじぎをするのだよ。」

「おぼうさんにおかあさんがあるって、おかしいな。」

「なにがおかしいものが、このわしも小さいときは、オギヤア、オギヤアとないたのだよ。それからな、おかあさんのおちちをコップコップといただいて、こんなにおぼうさんになったのだよ。」

「こういつてから、りょうかんさんは、」

「さあ、みんなこちらへおいで。」

と、おくざしきにつれていきました。

「それ、このたけのこをござらん。」

みると、ざしきのまん中のたたみをやぶって、のびているたけのこがありました。

「このたけのこが、えんの下にあたまをだしたので、おまえは水がほしいのか。」とたずねると、水をください。というのだよ。それで、手おけの水をかけてやると、たけのこがよろこんで、のびるわ、のびるわ。のびて、のびて、どうどうえんの下のいたで、あたまをコツンどうつ

たのだよ。そこで、ゆかいたをはがして、たたみのまん中にあなをあけてやったら、それ、このとおり、いせいのびるわ、のびるわ。

みんな、もつとまえへでてごらん。それ、たけのこにごはんつぶがついているだろう、それそれ、たけのこにごはんのつぶが——こりゃあ、たけのこごはんだよ。

「あら、りょうかんさん、ちがいますよ。ごはんの中にたけのこのはいつているのが、たけのこごはんですよ。」

「いや、たけのこにごはんつぶがついているのが、たけのこごはんだよ。」

「ちがいますよ。」

「わからない子どもたちじゃな。」

「わからないおぼろさん——」

子どもたちは、みんな帰っていきました。りょうかんさんは、帰っていく子どもたちをみおくってから、

「どれどれ、ゆうごはんでもたこうかな。」

といって、手おけをさげて、うらのいどばたに立ちました。むこうの山から、大きな月がのぼってくるどころでした。

「ああ、きれいなお月さま。」

りょうかんさんは、いつまでも月にみとれていました。

十二 ひわの子

さんちゃんが、友だちと、山へわらびをとりにいきました。その帰り道に、一羽の小鳥のひなをひろいました。ひなはたいそう小さくて、元気がなく、死んだようになっておちていたのです。

「これ、なんのひなだろう。」

「すずめの子らしいね。」

「ひばりかもしれないよ。」

「ちっとも動かないじゃないか。」

「かわいそうなもの、ひろっていい。」



って、かってみよう。」

「さんちゃんがひろって帰ると、おとうさんが、」

「すりえをこしらえて、たべさせてみよう。」

とおっしゃって、たまごのきみですりえをこしらえて、た

べさせてやりました。

ひなは、みちがえるように元気がでて、だんだん大きくなりました。

「ああ、よかった。おとうさん、ひとりでとべるようになるまで、かってやりましょうね。」

さんちゃんは大よろこびでした。ひなはすずめではありませんでした。ひばりでもありませんでした。あたまから

せなかにかけて、き色がかった美しい鳥になりました。

「これはめずらしい、ひわの子ですよ。ほんとうは、まひわというのですが、ふつうは、ひわ、ひわといっています。」

と、となりのおじさんがおしえてくれました。

夏休みがすむころには、ひなはもう、かごの中をどびまわっていました。

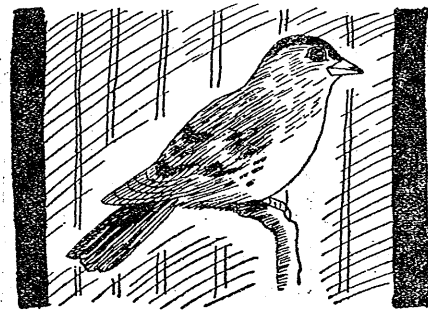
「おとうさん、ひわは自由にとべるようになりましたね。かごからだして、にがしてやりましょうか。」

「まだすこし早いようだ。自分でえさをどったり、遠いところまでとんでいくことはできませんよ。」

「じゃあ、もうすこしね。」

そういつているうちに、秋になりました。まいにち、わたり鳥のむれがとんできます。

その中には、ひわのむれもありました。さんちゃんのおうちのまつの木にとまったり、かえでの枝で休んだりしていきまし



た。

「チュイン、チュイン、チュイン、チュイン、チュッチン、チュッチン、チュウチュウジ。」

ひわの子は、それが自分のなかまの鳴き声だと思いました。そうして

「チュイン、チューイン、チューイン。」

こんなふうに、自分でもさえずりはじめました。

いちばんはじめに、それをおかあさんがききつけました。

「ひわが、いい声でさえずりはじめましたよ。このままか
っておいたらいいでしょう。」

でも、おかあさん。あした山へつれて行って、はなそう
と思っっているのです。」

そのばんのことでした。バタバタと音がしましたので、
みんながとびおきてみると、どこかのねこが、しのびこん

で、ひわをとろうとしていました。

「ジッ」というと、ねこは、おどろいてにげていってしま
いましたが、ひわは、かたのところにはがをして、ころが
っていました。さんちゃんたちが水をふきかけたり、くす

りをつけてやったりしますと、やっと生
き返りました。二三日すると、ひわは、
もどのように元気になって、かごの中を
とびまわっていました。

「もう、元気になったようですね。」

「いや、この鳥はとべなくなったらしい。
い。にがしてやれなくなったよ。」



おとうさんにいわれて、よくみると、ねこにひっかかれた羽がぶらりとなって、半分しかひろげられません。

「ひわさん、これからぼくの子だよ。いつまでもかわいいがってやるよ。山へはなしてやりたかったんだけど。」

さんちゃんは、ひわによくいつてきかせました。ひわは、「チュイン、チュイン、チュイン。」

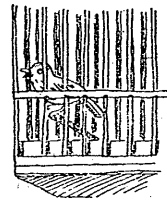
と、人なつっこい声で鳴きました。

さんちゃんがбенきょうをはじめると、ひわは、

「チュウチュウジ、チュウチュウジ、チュイン、チュイン、チュウチュウジ、チュウチュウジ。」

と、へんな声でさえずって、さんちゃんの本をよむ声をま

ねます。



さんちゃんが、ハーモニカをふきはじめる

と、ひわもよろこんで、

「チュイン、チュイン、チュツチン、チュツ

チン。」

と、早く、おそく、高く、ひくく、いっしょ

うけんめいにまねをします。

鳥かごは、おひるまえは、水道

のあるいどばたの高いところにかけますが、おひるすぎには、かえての木につるしておきます。



人がときどききて、水道をつかいます。水が、ジャー、ジャー、ジャー、ジャード、音をたてて流れているのをきいて、ひわは、そのまねをして、

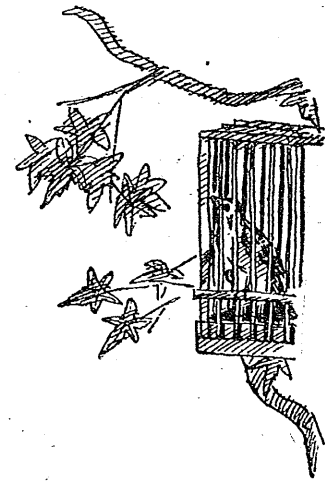
「ジャージャー、ジャージャー」。

と、すずしい声で鳴きます。

さんちゃんのおかあさんが、せんたくをしますと

「ジャージャージャー、ジャブジャブジャブ」。

と、ひわもまねをします。



かえでの木につるしておくど、いろいろな鳥がやってきます。すずめがきたとき、ひわが、

「チュイン、チュイン、チュイン」。

と鳴いてみせました。

すずめは、

「チチチチチ、チュピ、チュピ、チュピ」。

と鳴きました。ひわが、

「ジャージャージャー、ジャブジャブジャブ」。

と、さわがしく鳴いてみせます
と、すずめは、おどろいてどん



でいってしまいました。みそさざいが、くらい木の中からきたので、ひわが、

「チュイン、チュイン。」

と鳴きました。すると、みそさざいは

「チョツ、チョツ、チョツ。」

と鳴いて、木のかげにかくれました。

どこからか、しじゅうからがやってきて、

「ツイベー、ツイベー。シチビー、シチビー、シチビー。」

「ツープー、ツープー。チンカラカラ、チンチンカラカラ。」

と、いい声で鳴いて、おしまいに、

「ジュリ、ジュリ、ジュリ、ジュリ。」

と、本をよむようなひとりごとをいいました。ひわは、感心したように、いつまでもその声をきいていました。しじゅうからは、あくる日もやってきました。そのつぎの日もやってきました。それで、ひわは、すっかりそのまねができるようになりました。

いつのまにか、しじゅうからは、どこかへいってしまいました。ひわは、いつもそのまねをしては、ひとりよろこんでいました。

「まあまあ、この鳥は、いくつもげいができるのね。」

さんちゃんのおかあさんも、ひわをほめました。

秋になると、また、わたり鳥がやってきました。ある日、

二三ばのひわが、さんちゃんのうちのまつの木におりてきました。

ひわは、それをみると、

「チュイン、チュイン、チュイン、チュイン。」

と、せきこむように、さかんに鳴きました。旅のひわも、大よろこびで、声をあわせてうたいました。

旅のひわが、

「きみも、いっしょにむこうへとんでいこうよ。空はひろくておもしろいよ。」

といいました。

「ありがとう。ぼくはおともができないのさ。」

「どうして。」

「ぼら、羽がためだから。こうしていつまでも、ここにいらよりしかたがないのさ。」

「ここにいて、なにか、おもしろいことがあるのかい。」

「いろいろあるよ。」

そういって、ハーモニカのまねや、さんちゃんの本をよむまねなどを、つきからつきへとときかせました。

そこへ、さんちゃんが学校から帰ってきました。旅のひわは、おどろいて、すぐにまつの木の上へにげていきしましたが、かごのひわは、大よろこびで、「チュイン、チュイン。」をはじめました。

「きみ きみ。おりてこないかい。ぼくの友だちのさんち
ゃんだよ。ちっともこわいことはないから、いっしょに
あそぼうよ。」

かごの 中のひわは な
かまをよ びました。

は けれども、旅のひわ
てしまいました。

近いところに製材所が
できて、のこぎりのやかましい音が、

あさからばんまでひびきました。近所の人たちは

まいにち、こまった、こまったといっていました。しかし、

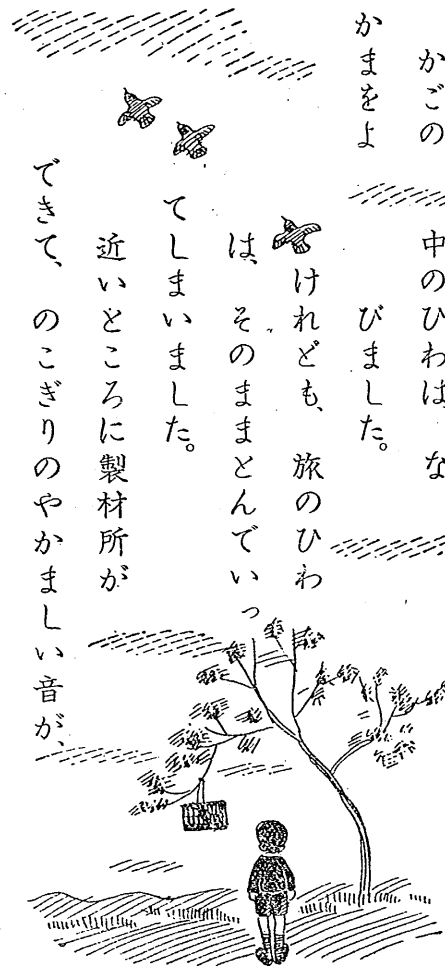
ひわは、すぐに、

「チュイン、チュイン、チュイン。リリリン、リーン、リ
ーン。チュイン、チュイン、リリリンリーン。」

と、まねをしました。

「小鳥でも感心なものだ、新しいことをどんどんおぼえて
いく。」

おとうさんのほめるのをきいて、さんちゃんは、ますま
すひわがかわいくなりました。



國語 第三学年 上
Approved by Ministry of Education
(Date Mar. 3, 1947)

著作権所有

著作發行者

文 部 省

省

翻刻發行
印刷者

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

印刷所

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

發行所

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

昭和二十二年三月三日 翻刻印刷
昭和二十二年三月二十日 翻刻發行
(昭和二十二年三月三日 文部省検査済)

160.8-1-5

羽 (100)	教 (78)	金 (65)	屋 (43)	貨 (32)	動 (19)	改 (8)	草 (4)
感 (105)	室 (78)	住 (65)	平 (44)	材 (32)	終 (21)	札 (8)	土 (4)
製 (108)	流 (78)	新 (68)	和 (44)	茶 (33)	点 (21)	乘 (8)	電 (6)
所 (108)	葉 (79)	週 (74)	通 (46)	工 (34)	帰 (21)	明 (10)	野 (6)
念 (83)	間 (74)	鳴 (46)	場 (34)	店 (28)	配 (11)	汽 (7)	
真 (83)	入 (77)	身 (49)	送 (38)	物 (28)	駅 (11)	船 (7)	
運 (83)	級 (77)	分 (55)	美 (40)	受 (28)	遠 (15)	荷 (7)	
語 (84)	記 (77)	今 (55)	岸 (41)	持 (29)	近 (15)	私 (8)	
死 (94)	時 (78)	写 (60)	田 (42)	炭 (32)	錢 (15)	旅 (8)	



教
育
研
究
K160.8
1
6
書

國語 第三学年 下

